卒業・修了にあたって

—学部—

卒業

「総科での四年間」とこれから

総合科学部 ❖ 岡崎里香

大学に入学してから使い始めた手帳も、四冊目を終え五冊目に入った。日々のあれこれや、ふと感じたことまで書きとめたものを、今読み返すと、四年の月日の思いがめぐる。東千田キャンパスでの三年間。大学生として最後の年を過ごした西条キャンパス。それぞれに愛着を感じている。短かったような長かったような、不思議な感覚だ。

総科は様々な選択を学生に託す、ユニークな学部であり、自由で暖かい雰囲気を持つ。異なる分野の素敵な人々との出逢いにも恵まれ、総科での四年間は、いい意味で私を欲ばりにしてくれたと思う。

卒論では、アメリカ文化の中での日本人像を、映画を通して分析した。広義の異文化接触の問題をこれからも研究していきたい。卒論を機に、皆それぞれ自分の道を探していくことになり、淋しい気もするが、次なる夢を実現させ、未来を切り開いていきたい。

最後に、たくさんの人に「ありがとう」を心をこめて。

学生時代に打ち込んだこと

文学部 ❖ 戸川智津子

サークルに入っていたわけでもなく、かといって専門の研究に没頭していたわけでもない私が、就職試験の面接で一番困ったのは〝学生時代に打ち込んだこと〟に関する質問であった。

私の学生生活をあえて表現するならば、アルバイト・遊び・そして勉強を広く、浅くこなしていたということになる。〝浅く〟というといい加減な印象を与えるかもしれないが、一つのものに長期間熱中しなかっただけで、その時その時は真剣に取り組んでいた。

そして、この四年間におこった様々な出来事や出会った人たちについて、言葉にすると何か薄っぺらい感じがするけれども、それら一つひとつが、私にとってはかけがえのない学生生活の一コマなのである。

就職試験の面接のような場面で、もっと胸を張って言えるようなことがあればそれに越したことはなかったのであろうが、何も特記すべきことのないように思えるこんな学生生活でも、何年か後には懐かしく思い出されるような気がする。

秋季合宿にて

みなさん、ありがとう

教育学部 ❖ 若林仁子

卒業という言葉の持つ感傷的な響きがあまり好きではなかった私も、人が想いを巡らせる季節だと、今はわかるようになった。（これも歳をとった証拠？）

アルバイトやボランティアによる社会勉強。学祭やサークル活動。専門の学問の楽しさや自分自身の発見。ウイスキーの苦い味。そして学科の友達を

教育学科の合宿の一コマ

はじめとする多くの人々。この四年間は未知なるものとの出逢いであった。

出逢えてありがとう。普段は気づかなかったけれど、偶然に見える必然の出逢いを、これからは大切にしていきたい。卒業に際し思うところはいろいろとあるが、ありがとうという気持ちと前向きな姿勢を忘れないでいたい。

大学生活で得たもの

学校教育学部 ❖ 栗田 美津代

男でも女でもいい。遊びでも趣味でもいい。死ぬ間際に、「(あなたに)出逢えてよかった」と思えること。これが私の最近の目標である。

素敵な男性と、なんて注文はつけないが、出逢いはまず自分を磨くことからかも？ と、おなかの肉をつまんでしまった。

小林寺拳法総本山にて

私が高校生の頃夢見ていたバラ色の大学生活が、もうすぐ終わろうとしている。

はたして、自分の描いた夢どおりの生活が送れたのだろうか。バイトやってお金ためて旅行して、洋服買って、ほどほどに勉強やって、好きな時に帰省して、のはずだったが、……。

全てを変えたのは、なんと少林寺拳法部に入部したことである。バイトしたお金は合宿代に消え、勉強したくても(!?)できなくて、帰省したくてもできなくて、私がこの大学生活で得たものは、護身術と倹約の精神である。

しかし、私が得たものはこれだけではない。もっとすばらしいものを得た。それは、仲間である。仲間がいたから、辛いことも乗り越えることができたし、頑張ることもできた。一緒に苦しんで、辛い思いをした仲間だからこそ、真の仲間だと胸を張っていえる。

この仲間も、卒業して全国各地に散っていく。でも友情はずっとずっと続くだろう。卒業してしまうのがちょっぴりさみしい今日この頃である。

楽しく学ぶ

法学部 ❖ 石川 美也子

大学生活は高校生活のようにはいかない。自分が何をしたいのかを考え、そのための手段を自分が調べ、自分が実行し、自分がその全責任を負う。今まで受け身だった自分を大改造する、貴重な四年間となった。

一九九二年度法学部皐月杯ソフトボール大会で優勝(後列向かって右端が筆者)

こうしたなか、私は刑法ゼミに入ることを望んだ。教室では、議論を交わし、互いに思いもつかなかった考え方を知る。さらに甲斐教授に率直でわかりやすい説明を加えて頂き、私は刑法を楽しみながら学んだ。教室外においても、刑務所参観という二度とない機会を得た他、蔭ながらソフトボールの応援に燃え、冬休み明けは百人一首で白熱し、多くのことをみんなと楽しんできた。

人間は一生勉強だと言われている。しかし、自ら動き、かつ、楽しまなければ、身にはつかない。何事も自分から学ぼうとし、それを楽しむ気持ちを、私は忘れないでいたい。

恩師

経済学部 ❖ 紙田 光豊

自分は得な性格である。多少のことなら楽しめてしまい、いい方に考えてしまうのである。例えば、一年生の十二月、足を骨折し、筋を痛めてしばらく入院したのであるが、その間にも何人か尊敬できる人々に出会った。

今でも強く覚えているのは、工事監督をされていた方である。彼は癌に侵されていたのであるが、家族にも死を覚悟させており、本人もひるまずたくましく生きていたのである。そのような、彼の何というか「生きざま」に影響され、自分自身、今の自分があるように思うのである。

広島名物「おしゃもじ踊り」

人は、必ず、大きな影響を与える人に出会うといわれるが、自分にとっては彼であり、大学時代に出会えてよかったと思うのである。退院後一度も彼とは会っていないが、もし今も生きておられたら、卒業までにもう一度会っておきたいと思うのである。

Enjoy「広島」

医学部 ❖ 荒井 次一

この原稿を依頼されて、まず思ったことは「げっ、もう卒業！」だった。

私の大学生活四年間というものを、これを機会に回想してみたいと思う。

大学生活を終えるにあたって

歯学部 ❖ 平岡秀樹

入学したての頃、映画『仁義なき戦い』と同じ言葉を話す広島の町は、田舎からやってきた私を、まるで満員電車の中で、必死に屁を我慢しているかのように、おどおどさせたものである。

そんな私に、初めて訪れた事件は、一人暮らしを始めたその日に、その下宿先で起こった。なんと、ユニットバスのドアが開かなかったのである。おどおどした私は、このドアの向こうにはバラバラ死体が隠されているに違いないと思い込み、トイレは友達のところまでダッシュし、風呂は銭湯に通っていた。ちなみにこの生活は、不動産屋に相談する二週間後まで続いた。

紙面の都合上、これ以上書くことができないため、続きを知りたい人は四階矢田研まで。（女性に限る！）

ツーリングにて
初めて見る太平洋にびっくり！

大学生活四年間で学んだこと

工学部 ❖ 片山嘉国

六年前、東千田の森戸道路を胸をはって歩いた。総科の階段教室で映画を見た。初めてのことが多かった。一人暮らしもそうだったし、徹夜で流川から授業に通うこともあった。この六年間、様々な経験をしたと思うし、そのたびに多くの人に出会うことができた。

そして、この機会に父母に感謝したい。これまで私が歩んできた二十五年は、常に両親の援助があったおかげである。特にこの六年間は両親と離れて暮らしたわけで、その中で「金は出しても口は出さない」という姿勢を常に保っていた。信頼という言葉でもなく、諦めでもなく、ただ見守ってくれた。

一緒にいるわけではないので話せないこともあるし、中途半端に話して不安にさせたこともある。時には怒りながら、ぐちを言いながら、笑ってごまかしながら、それでも私のことを見てくれた。私を育て、愛してくれた両親に感謝する。

仲間と最後の全国歯学体に参加
（後列左から３人目）

目的意識と自分らしさ

生物生産学部 ❖ 佐藤英雄

私は、大学の四年間で、大事なことをたくさん学んだ気がする。

友だちを呼んで騒いだりしていると、ノイローゼ気味の下のお兄さんに、早朝から「きのうはうるさかったなー」と、アパート中に聞こえるほどの大声で叫ばれてしまうということ。恐い人も実はすぐ近くにいる。

友だちと相談して、サークルの女の人の誕生日には、スーツを着てプレゼントを持ってゆこうということになり、それを約一年間続けて三十人近くの人のところに行ったのに、自分たちの誕生日には何ももらえなかった。やはり、世間は冷たいものである。

海の砂浜で、のんびりと体を灼いていると、砂で埋められ、挙げ句の果てに、道行く水着のお姉さまに笑われてしまうような砂人形ができあがってしまうということ。

持つべきものは、良い先輩、良い友だちである。

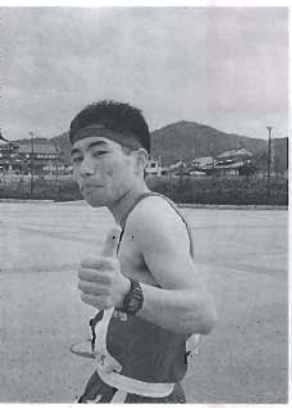
まだまだ大学生活を思い出せばきりがないが、現実の社会のほんの一部を見たような気がする。

大学で知り合った人たちは大事にしていかなくては、と思う今日この頃である。

私の四年間の大学生活―。今、それを振り返って感じることは、実にまとまりがなく、受身的であったということである。結果的には充実していたと思えることもいくつかやったのではあるが、そのきっかけは人に勧められたものであったり、またその経過はいきあたりばったりだったりしていて、自分自身、流されていたなあ、自分の意志が希薄だったなあと感じることが多かったようである。

なぜそうだったかというと、それはやはり、「目的意識」をもって行動しなかったからである。では、それだけあったら良いかというとそうでもなく、それをうまく調節する「自分らしさ」というものも、また必要である。

「目的意識」と「自分らしさ」。どちらが欠けても困るし、またバランスを保つことも難しいことである。しかし、大学生活をより輝かしいものにするには大切であるだろう。



フェニックス駅伝出走直前

―大学院専攻科―

修了

大学院生活での収穫

文学研究科博士課程前期 ❖ 山口 修

予想していた通り、瞬く間の二年間だった。修士課程の院生に与えられた、研究者として必要な基本的な知識を身につけるという課題を実践するには、あまりにも短かった。学部時代とは異なり、授業は能動的なものになり、一つ一つの言葉を様々な角度から検討し、解釈していく姿勢を求められ、自分の考えを正確に表現できるようにならなければならない。毎時間、緊張感が漂う。

しかしその一方で、先生や先輩、後輩の考え方に触れることで新たな視点を身につけることができ、県外の大学出身の私にとって、広大での二年間は、これまでにない多くのことを吸収することができた。

大学院は様々な考えを持った人々の集まりであり、仲間と自由に討論し、自分の気づかなかった見方を発見したり、相手に教えることで自分の知識を確認したりと、毎日が訓練の場であったように思う。それにもまして、多くの人々と知り会えたことが、大学院生活の一番の収穫だった。

お教えをいただいた皆様に深く感謝したい。

「S先生のこと」

文学研究科博士課程後期 ❖ 寺田由美

昨年の夏、老若男女問わず様々なアメリカ史研究者が年に一度集う研究会に出席するため、名古屋へ出掛けた。そこで、二年ぶりに会った大学院生の友人と話に花を咲かせたのだが、そうこうするうち、話がS先生のことになった。

「二年前には、S先生もこの研究会にいらしてたわね」という彼女の言葉に、その年の研究会のことが思い起こされた。二年前のその日、テレビでは、北の国で、クーデターを起こした議会保守派と軟禁状態の大統領を支持する市民との間で衝突が起こり、市民に一人犠牲者がでた。アメリカ政府は犠牲者がでたことに強い怒りを表明している、とのニュースを伝えていた。昼間の日程を終え、同じ宿舎に泊まる者が大広間に集まり、思い思いの格好でこの画面を見ながら、口々に所見を述べあっていた。

そんな中、S先生は、銃によって一日に十人、二十人と犠牲者をだす国が、しかも命の重さは同じだと常日頃強調する国が、一人の犠牲者をだしたことにあんなに憤ってみせるのには矛盾を感じるという意味のことをおっしゃったのを覚えている。その時はいささか納得のいかぬ心持ちになったのだが、アメリカの銃による犯罪の多さが国際的にクローズアップされる現在、時にこの言葉を思い出す。

アメリカ史学界をリードする存在であり、広島大学の教授であったS先生は、それからほどなく入院され、桜の花が散り始める頃逝かれた。

先生が亡くなられて、間もなく三度目の春を迎える。

私が得たもの

教育学研究科博士課程前期 ❖ 高尾香織

現在修士論文を執筆中で、修了を迎えての感慨を覚えるほどの余裕はなく、後になってあんなこともあったと思うだろうに…と思いながら筆を進めている。

大学院に入ってから私が痛感したことの一つは、自分の背が低いことである。

その状況について述べることはしないが、ともかく他の人は苦もなく手を届かせるのに、私だけがどんなに手を伸ばしても届かないのである。僅か二センチほどのことだが、それでも届かないものは届かない。私はその場で跳び上がってみたり、踏み台となるものを探してこなくてはならないのであった。

国語教育学会デビュー（最前列）

これとよく似た状況は、視点を変えればいくらでも見つかると思うのである。現在の自分の力だけでは、どんなに精一杯頑張ってみてもどうにもならないことがある。ただ手を伸ばすだけでは決して届かないものがたくさんあるはずだ。

そんな時に、跳び上がったり踏み台を持ってきたりしたように、ちょっと自分の状況を変えられる要素を持っているのといないのとでは大違いであろう。私にとって大学院の二年間は、もっと高く跳ぶ力を鍛え、より多くの踏み台を手に入れる期間であったはずである。

この二年間が、今後の大きな一歩を、きっと支えてくれることであろう。

私の宝物 ―留学生活―

教育学研究科博士課程前期 ❖ 李穂耕

大学院での研究も残すところ一か月あまりになった。

大学院入試のため頑張った時期ももはや三年前のことになった。院生になってからは発表の準備をするのに、足りない日本語の能力で悩んだりしたのももう過ぎた時間の思い出になろうとしている。

多分、その時はつらいこともいっぱいあって、国に帰ってしまいたいと思ったこともあっ

フラワーフェスティバルで国際交流

時間革命

教育学研究科博士課程後期 ❖ 杉村智子

ただろうに、今や心の一隅では、何かなつかしいという気持ちがよみがえる。

この三年間は、異文化に出会えたことだけでも意味のある時間だったと思う。それ以上に、私にとって大切な時間になった理由は、いろいろなことを体験し、偏見などを捨てることができたということである。

最初は「日本人は～」とステレオタイプで日本人を評価しがちであったが、実際、友だちがたくさんでき、付き合いが深まるにつれて、自分が持っていた日本文化に対する考え方がいかに偏って、歪んだものであったかがわかるようになったのである。

この留学を通じて得た経験は、私の人生の宝物として、一生残るだろうと思うのである。

人混みナシ、時刻表必要ナシ、腕時計装備不要！　都会での学生生活から一転して時間の流れがゆるやかな場所で三年間を過ごすことになった。時間の感覚の変化が思考に与える影響はかなり大きいらしい。以前なら気にも留めなかったことに感動したり疑問をもったりしたし、何を見ても（聞いても読んでも）おもしろいと思った。

例えば最近、風邪をひいて、風邪の回復過程において鼻水の質が変化することに気づいた。透明で水みたい（すごくつらい）→透明だが少しネバネバ（つらい）→白みをおびていっそうネバネバ（回復のきざし）→青ばな（ほぼ健康）。そしてさらにまた、疑問を持ってしまう。青ばなの〝青色〟はどのような成分による〝青〟なんだろう？

幼児心理学研究室の合宿

ゆっくりした時間の流れで、このような思わぬ発見（？）や、異なったモノの見方ができた三年間だった。それが研究活動に多少なりとも生かせたのではないかと思う。

大学生活を振り返って

教育専攻科 ❖ 加藤雅子

西条キャンパス　テニスコートで

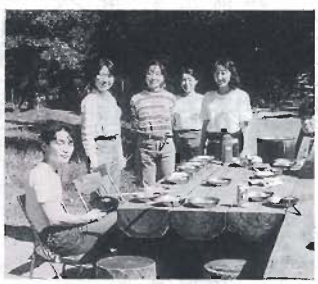
平成元年四月に広大教育学部に入学し、広島での生活がはやくも五年になろうとしている。教育学部の西条移転に伴い、私は二回生から西条で学生生活を送っている。平成二年の西条キャンパスというと、快適な学生生活を送るにはあまりにも不便な環境ばかりであった。交通手段、買い物、アルバイト、図書館等々。今でこそ、プールバールが開通し、広大西条駅間の循環バスが通り、「ショージ」も夜十時まで営業するようになった。

けれども、そんな西条の生活にも快適な面もあった。敷地が広く、使用できるテニスコートの面数は東千田よりも多く、澄んだ空気の中で存分に汗を流すことができた。また、校舎は新しく、食堂も清潔。冬になると友だちが集まって鍋パーティーも西条ならでは。総科の移転後、西条キャンパスは活気に満ちてきた。今後、より一層の、大学と東広島市の発展を期待している。

修了を前にして

学校教育研究科修士課程 ❖ 磯辺純子

いい先生になりたいー。二年ばかり前の偽らざる気持ちだ。「いい先生」になる近道はさっさとゲンバに出ることなど百も承知だったが、「いい先生」というのもわかっているようで、実は得体の知れないものだった。私は、自分の歩く道を確かめたかった、というかちょっと寄り道がしてみたかった。寄り道とは言ったものの、当初はかなり気負っていた。あちこちに足を運び、貴重な時間を得ながらも悶々としていた。


ドレミスタッフ全員集合

そんな中、公民館で子どもと直に触れる機会を得ることになる。「思いきり表現していく中で自分を発見しよう」というこの活動のテーマに、私自身を重ねる思いで必死だった。何とか子どもに近づこうと手を講じつつも、どこか子どもと距離を置いていた。必死になっている間はさっぱり駄目。二年目になり、無我夢中で遊んでいる私に気付いたとき、いつしか子どもと交信している私があった。

この二年間、さまざまな出会い、発見があったことを心から嬉しく思っている。

指導教官に教えられた研究の味

学校教育研究科修士課程 ❖ 朴錦銀

私の大学院生活は、まず、ほとんどが指導教官（西山　啓教授）の研究室であった。「芸に遊ぶ」というスローガンで、学問というものは、悠々楽しみながら勉強するもの、ただ、机の上で勉強することとは限らず、世の中にはいろいろな学問があるはず。こうした指導教官の説明は、留学生活の不安や緊張をほぐし、気持ちの余裕が生まれ、研究が楽しくなった。先生や研究室の学生と、あちこちを旅行しながら日本の文化を学んだり、毎年学会で発表したり、多忙な研究生活を送ることができた。

もう一つは、韓国と日本の高校の交流に、三年間通訳として活動したことである。青年

指導教官のお誕生日に

の間に培われた友情が、相互理解を深めることになり、両国の親善友好の大きな絆になることを期待したい。

これからは、日本留学を一つのステップとして、研究する教育者として、韓国の教育に、国際交流に貢献したい。

お世話になった指導教官や先生方、研究室の皆さんに、尊敬と深い感謝を捧げる。

宝箱としての「場」

学校教育学部（特殊教育特別専攻科）

（神辺中学校教諭）

服部秀樹

久しぶりの母校で家族とともに

多くの期待と希望をもって、この特殊教育特別専攻科に入学しました。現職教師として、教育活動を通して膨らんだ多くの課題を整理し、発想の転換と専門性を、大学としての「場」に求めたからです。

十数年たって学生の立場に戻りました。プロの教師として自己の責任で学習や課題解決を求められる社会も、学び・教えて頂ける学生社会も、両方とも学びとしての「場」です。

現場を経験し再び学生の立場になってみると、学生社会の教えて貰って当り前だったこと、講義での質疑応答や、研究室を訪れ質問をすればアドバイスや良書を紹介して貰えることが、大変有難いことになってきます。

大学生活を振り返ると、教育現場で毎日の活動に追われた生活から、もう一度自己を見つめる「場」として、「あっという間」の一年間でした。先生方とも漸く話しが弾み出し、研究や学問が面白くなり、もっと学びたいという心が「場」と共に広がりました。

大学生活でのいろいろな「場」は、学生にとって「宝」であり、広島大学は人間育成の「宝箱」と言ってよいと思います。

留学回顧

社会科学研究科博士課程前期

崔国強

時間の経つのは本当に早いもので、日本に留学してあっという間に四年という月日が流れた。四年間をふりかえって見ると、苦しさと楽しさが入り交じり、充実した留学生活を送ったと思う。

日本に来た当初、日本語がほとんど分からず、まず言葉を覚えるのが一苦労であった。また日本の生活習慣にも慣れなくて戸惑うところがいっぱいあった。大学院に入るために猛勉強して、徹夜したこともあって、運良く合格できてうれしかった。

留学を通じていろいろな体験をし、日本をより深く理解でき、自分自身も鍛えられて人生経験を豊かにしえた。日本でたくさんの友人ができたことも、留学の一つの収穫である。こうした大切な友情を携えて、国に帰ってもこの絆を大事にし、日本と中国の懸け橋になって行きたいと思う。

広島大学に留学してほんとうに良かったと思う。皆様ありがとうございました。

二年間をふりかえって

社会科学研究科博士課程前期

高橋恵利子

この二年間は何と言っても、移転、である。一年目、御多分に漏れず私もかり出され、本の並べ変え、箱詰め、運搬、カード整備、ラベル張りなどに従事した。極寒のなかで貨車の蔵書を箱につめて運び出した体験は、一生の苦難を支えてくれることだろう。けれど、日頃お目にかからない先生方や先輩・学部生とも接することができ、結構楽しい作業でもあった。休む間のない演習からの精神的逃避だったのかもしれない。

そして、二年目。ピカピカの校舎でお勉強、と思いきや、登校初日の仕事は掃除だった。それに、西図書館の開館までは大学にきても仕事にならないという有様。あと五年もすれば整備の行き届いた大学になるのだろう。後輩たちはそれを当然のように享受するのだ。ダンボールも畳まずして……。どうやら私たちは二番目に損な役回りだったらしい。

この二年間は私にとって何だったのか、と自問するのはちょっとこわい。後輩は就職、友人は結婚して子供を生んだ。私は…。その答えは時間が出してくれるのだろう。その時までこの酒とバラの日々を心にとめておこう。

最後に、私の院生生活を楽しく有意義なものにしてくださった諸先生方、友人たち、また職員の方々に深く感謝したい。

無恥の知

社会科学研究科博士課程後期

山中逸郎

森戸道路にて（後列左から２人目）

広島へ来た五年ほど前、世間は未曾有の好況だった。そして、現在はこれまた戦後最大の不況である。世の移り変わりというのは実に激しいものである。自分自身のことはといえば、何かを体得したというよりは「何を身につけなければならないか」が、少し分かった気がする程度である。ここから去らねばならないのは残念というよりも、恥ずかしいというのが実感である。事情が許せばドイツの学生のように何年も粘っていたい心境でもある。ただ、自分の考えることをストレートに議論できる人々に巡り会えたことはとても大きな収穫であったし、学部時代には経験できなかった刺激であった（たいていは自分の無知を思い知らされたに過ぎないが）。「知らないことは恥ずかしいこと」ということにやっと気がついた次第である。経済学研究は比較的新しい大学院であり、移転事業を控えるなど戸惑うこともあったが、今では学生の数も増え、大学院としてはこれからが発展の時だと思う。

末筆ながら御指導いただいた諸先生方に感謝の意を記しておきたい。

変わる？広島

理学研究科博士課程前期

本谷浩二

「究極の選択」

理学研究科博士課程前期 ❖ 阪口耕一

新装なった広島県立総合体育館と基町クレドビルを望む

私は、広島大学入学以来六年間自宅から通い続け、二年半前の理学部西条移転以来、片道四〇キロの長距離通学をして来た。毎日、広島市内から国道二号線を通って西条まで通って来るのだが、車から見ると、この六年間、特に最近の二年間に広島とその周辺部は随分変化して来たように思う。新しいビルがたくさん建ち、交通網の整備も進められている。アジア大会の影響も少なくないのだろうが、広島にもまだ変化を進められるだけのパワーがあるということなのだろう。

しかし、その変化も良い方向性を持っていないと継続していかない。良く変化することは、その変化そのものも大事だが、それにより更に変化を継続していくということに大きな価値があると思う。

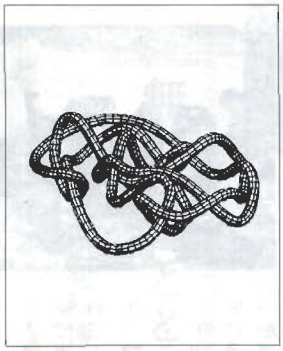
六年という時間は、客観的に見れば決して短いとは言えないが、二十代の前半の六年は非情に早く過ぎて行ったと思う。果たして、私はこの六年間に質、量ともに良い変化をしたのだろうか。

「こんなはずではなかったのに…弱ったなあ。」

今から二年少し前の十月のある日、和歌山にある小さな下宿の部屋で、僕は一人悩んでいた。目の前には茶色い封筒が二つ。右が、和歌山県教員採用試験の合格通知、左は、広島大学大学院理学研究科入学試験の合格通知。

「さて、どちらを選んだもんかなあ。」

今日も、僕は十九インチの大きな顔をした計算機と顔を突き合せている。広島に来て二年間、毎日毎日こんな光景がずっと続いている。計算機の使い方というのは使い手によってさまざまであろうが、僕の場合は専ら三次元グラフィクスを作ることが目的である。よって、口をつく言葉も「この色はちょっと…」、「滑らかさが足りないなあ…」、「どうも美しくない…」などとまるで数学的でないことばかりである。



現在研究している「結び目」を計算機により描写した3次元グラフィックス

大学院へ来て始めて計算機に接して、このような数学との関わり方があったことは大きな発見であった。そして、こういうことを楽しんでやっている自分が何より大きな発見であった。

時々、「もしあの時、右の封筒を手にしていたら…」と考えることがある。

どちらの選択が正しかったのかは今だにわからない。しかし、この二年の間に計算機の技術を学び、数学を勉強して、何人かの友人ができた。その集大成となる修士論文の題材に、僕は結び目理論における新しい不変量の計算を取り上げた。これは、今までに培った知識と技術をすべて詰め込んだ、僕なりのこの二年間に対する答えである。

そして、この結果とともに、以前は気づかなかった自分の強い部分と弱い部分が幾つか見えるようになった。そのことが、今の自分にとって何よりも大切であり、最も誇りに思えることであるということは間違いなくわかっている。

広島で過ごした九年間

理学研究科博士課程後期 ❖ 板屋智之

私は、学部時代・大学院時代を合わせて九年間を広島で過ごしました。この九年の間に色々なことを経験することができました。クラブ活動、講義、バイトに忙しかった学部時代。そして、研究活動に打ち込んだ大学院時代。また、大学院時代には非常勤講師として高校の先生も経験することができました。

特に、大学院での研究生活を通して、化学的に自然現象を捉えることを学び、研究することの楽しさと喜びを知ることができました。大学院で学び経験したことは、私のこれからの研究者としての生活にとって、非常に貴重なものとなるでしょう。そして、広島大学大学院修了生として、誇りを持って歩んで行きたいと思います。

最後に、研究のみならず、辛い時、悲しい時に支えてくれた人達に感謝するとともに、九年間経済的に支援し、なおかつ研究を続けることを理解してくれた両親に深く感謝します。

わんこそばに挑戦

友人達へ

医学系研究科博士課程前期 ❖ 徳田衡紀

この二年間の大学院生活は、あっという間に過ぎてしまったように思える。四年間の学生生活に飽きたらず、さらに大学院に進学してからこの二年間は、ほとんど地味な研究生活であった。試行錯誤の連続で、何日も夜遅くまで残って実験を続けた、つらく苦しい日々もあった。それを乗り切ることができたのは、友人達のおかげであると思っている。人生、実験上の相談はもちろんのこと、何かと理由をつけては酒を飲んだり、早々と実験を切り上げて先生方の目を盗むように抜け出して遊びにいったりしたこともあった。こうして修了を間近にすると、これらのことがとてもなつかしく思える。やはり大学時代の友人とはこれからもこの関係を大切にしていきたい。そしてこの場を借りて一言お礼を言いたい。

〝ありがとう〟

学生最後の年はJリーグ元年だった

井出研究室での三年間

医学系研究科博士課程後期 ❖ 深見純也

薬学ソフトボール
大会での昼食風景

大学院で得られたこと

歯学研究科博士課程 ❖ 松浦尚志

大学の研究室で実験し始めてすでに六年、特に広島に来てからの三年間は、足早に過ぎていった。広島に来てからの生活は、一人暮らしであったために、朝から晩まで実験で、研究中心に生活が回っていたという感じでした。

しかし、私が所属していた井出研究室は、時間が厳しく拘束されていたわけでもなく、研究は比較的自主性に任されていたので、毎日が実験に追い回されているという気はしなかった。何かといえば研究室で飲みをしたり、誕生会をしたりというアットホームな雰囲気であったことも、そう思わせなかった理由であった。

しかし、個人の自主性に任された研究室であっただけに、逆にいえば、自分に対する厳しさが求められた三年間であった。これらのことから研究者としての心構え、そして言葉では言い表せない多くのことを学べたと思う。

研究室にて

私にとって、四年間の大学院生活はお金では買えない非常に有意義なものであった。これは、単に学位取得というちっぽけな目標が達成されたということではなく、物事の考え方が学べたということである。一日中研究のことだけを考え、実験に没頭し、物事を考える過程を経験することができた。この四年間、満足なデータが得られなかったり、今後何をやったらいいのかわからなく悩み続けたことばかりだったが、この悩み続けたことが非常に価値あることだったと思う。

私にとって大学院生活の一番の思い出は、学会発表などの表舞台ではなく、一日中研究に明け暮れる日々を送れたことである。卒業後、具体的に何をするかは検討中だが、今後私が何をするにしても、この四年間に得られたことが全てのベースになると信じている。

最後に、私を指導して下さった先生方、支援して下さった人たちに心より厚くお礼を申し上げます。

私の大学生活について

工学研究科博士課程前期 ❖ 井川健一

自分の中で一番印象に残っているのは、やはり研究室配属後の大学生活だと思います。

私の研究室は、私が配属されるときに初めてできたので、最初は教授が一人、学生が四人という小さな研究室でした。人数が少ないので、先生には大変ご迷惑をおかけしたと思います。研究室も三年目となり、あの頃殺風景だった部屋の中も今は人数も増え、設備も充実し、研究室らしくなってきました。論文製作のときは辛いこともありましたが、本当に賑やかに楽しく過ごすことができました。

卒業しても私たちから始まったこの研究室を懐かしく思うことでしょう。そして、これからこの部屋を卒業して行く学生たちがここでの生活をいい思い出として残していってほしいと思います。

ゼミ旅行　日御崎にて（中段左）

分、気楽で、ゼミ旅行等楽しく過ごすことはできたのですが、研究を進めて行く上で、設備の面においては足りない部分も多く、また研究について質問できる人が先生しかいなかったので、先生には大変ご迷惑をおかけしたと

言葉の問題が一番困ったこと

工学研究科博士課程前期 ❖ イマデ・テゲー・アリャ・ウダヤ

一九九二年の四月、広島大学大学院工学研究科構造工学専攻博士課程前期に入学した。研究テーマとしては、有限要素法を用い、小型船のモジュール化された機関室の船体構造の振動特性を研究している。自国では国営造船会社に勤めることになるので、この専攻分野が活かせると思う。

さて、今までもう二年間以上、この大学で勉強してきている。この二年の間、私にとって日本語や日本の文化や日本の生活習慣さまざまなことに触れてきた。毎日、研究室では日本人学生のみと交際していて、言葉の問題が一番困った。たどたどしい日本語を使うので日本の友人から冗談をいわれ〈日本語難しい・い・い・ね！〉といわれていた。日本語の実力不足で日本に留学をしているため、とても不安を感じている。不安を解消するために一生懸命に勉強している。先生方と日本の友人達も一生懸命に教えてくださっている。〈みなさんどうもありがとうございます〉

いまでも、日本語では難しいことはまだたくさんあるが、しかしだんだん上達してきた。その他、日本文化や生活習慣も教えてもらうことがよくある。

日本人学生以外は、インドネシアの友人達と他国の留学生友人達との交流も大切にしていた。幸いにも広島大学にいる日本の友人やインドネシアの友人や他国の友人達と意気投合しているので、とても恵まれた環境にいると感じている。

大学での友人のみではなく、家にいる主婦や子供達も市民との交流を大切にしなければならない。

私は、日本に来る前にテレビで色々日本のことをよく見ていたが、それほど関心があったわけではない。今遠い国から、せっかく日本にいるのだから日本を多面的に観察しなければならない、と思う。異なった地域にいること、または違う文化や違う習慣の中で生活することは大きな決断が必要であるが、実行は思ったほど難しいことではない。

自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で感じることは一番大事なことじゃないんでしょうか？。

第４回広大国際駅伝にて
（インドネシアチームとともに　左端）

大学生活を振り返って

工学研究科博士課程後期 ❖ 吉高淳夫

私の大学に対する認識が変わったのは、学部四年で研究室に所属したときだと思う。それまでの授業や実験では、与えられてばかりで、それをこなすことを要求された。自分には興味の涌かないそんな状況から一転して、自分で研究の計画を立て、それを遂行することが要求された。研究の進行や結果に対して良きも悪しきも自分の責任であるという点、シビアではあるけれども、自由に、自分の発想でできるということは大切だと考えている。

今迄、数回ほど国際会議に出席して自分の論文を発表したり、海外の研究者と議論したことがあったが、その瞬間がいちばん充実していたように思う。そのとき、学部の時以来学んで来た、時にはつまらなく、無意味に思えたようなことも含めて、全てがひとすじの糸で通されたような気がした。その、ある種の感動のようなものが、日頃の単調で地味な研究活動を続ける力の源であるように思う。

さまざまな経験を積む機会を与えて下さった先生方に感謝したい。

○――――○

有馬記念の日

生物圏科学研究科博士課程前期 中村哲

倉橋島へのゼミ旅行（右端）

M1だった九二年の年末の有馬記念の日は、朝から牛の消化管内容物のサンプリングがあった。サンプリングを農場で行うため、車で向かう。学会発表のために朝六時頃から夜一時過ぎまで分析を行う日々が、前日まで一か月近く続いていたせいで、強い睡魔が襲ってくる。厳しい寒さも襲いかかってくる。電気ストーブで手を暖めながら行う。僕は辛くて仕方がないのに、牛はおかまいなしだ。その上、腸の内容物はなかなか出てきてくれない。

やっとの思いで研究室に戻ると、先輩が有馬記念の予想をしていた。僕はメジロパーマーの逃げ切りと予想した。レースはパーマーがスタート直後から後続を少しずつ離して行き、最後は、後続馬の猛追をかわし逃げ切った。予想は的中した。その瞬間、先ほどまでの辛かったことは忘れてしまった。

大学生活の中で辛かったことは、卒業するとすぐに忘れてしまうかもしれない。でも、どこかで役立つだろうと思う。最後に、有意義な大学生活を与えてくれた研究室の先生方をはじめとする多くの人々に感謝します。

無駄なことと無駄でないこと

生物圏科学研究科博士課程後期 ❖ 平山恭之

広島に来てから足掛け九年になる。最初の三年間はそのほとんどがサークル活動（影絵劇）のために費やされ、残りの六年間は主に研究に使われた。学部三年までの間は会長や脚本・演出をしていたこともあって、サークル活動に没入していた。当然、この間の生活は、どうひいき目に見ても真面目な学生のそれとはいえなかった。

そして四年生になり、研究室に入ることになった。大学での勉強に対する興味は、三年間でほとんど消え去っていたので、さっさと就職してしまおうと思っていた。ところが、実際に卒論を始めてみたら、地質学の研究は非常に面白いものであることがわかり、今にいたっている。

これまでの大学生活で一番感じたことは、無駄なことと無駄でないことの境界はとても曖昧で、そう簡単には把握できないということだ。サークル活動を通して経験したことや考えたことが、研究をする上で非常に役に立っているように、今の僕には思える。

影絵サークルの公演先で（左から４人目）

新たなる道へ

生物圏科学研究科博士課程後期 ❖ 李南周

今まで、一体何ができたのだろうか。そろそろ古里の懐かしさと暖かさを思いだしつつ、故郷に帰ろうとしている時期なのに。

日本の土を初めて踏んだのは、いつの頃だっただろうか、時間が過ぎても忘れられない思い出が走馬燈のように浮かんでくる。

言葉が通じなかったことや、新しい環境になかなか慣れなかったこと、身振り手振りでやっとのことで解決できたこと、笑顔は世界の共通語だと感じたこと、挨拶の微妙なニュアンスの難しさ…。

今、考えてみると、いい思い出となっている。そのさまざまな出来事がばねとなって、ここまで来られたのかも知れない。

研究は誤りから、遠い道も一歩からという諺がある。私が持っているのは健康な体と健全なやる気だけ。とにかく机の前に座って、研究に取り組めば、何かできる。そのような気持ちで過ごした四年間の留学生活が、今、終わろうとしている。今、振り返って、何をしたのか、何ができたのか、いくら考えても分からない。しかし、見えないことや、考えられないようなことと、自分も知らないことが、まだどこかに残されている。また、もう少し頑張ったら何かができたのかも知れないのに、という反省もないではない。

卒業と同時にまた始めないといけない。勉強は始まりと終わりの反復であり、また、未完成の作品であると思うから…。

今まで勉強してきたのは、氷山の一角に過ぎない。これからもその繰り返しかも知れない。しかし、今まで経験してきたことを、これからの自分の人生にうまくいかしていけば、道は開けて来るのではないだろうか。

行かなければならない新たな道があるから、その道を目指してこれからも頑張って行こう、と思う。

山があるから、登るように…。

三滝方面から見た広島の風景